



親子を探そう

初夏に出会う野鳥たちの多くは、お父さんか母さんか、その子供のはずです。野生の命は常に食物があるとは限らず、ライバルも天敵もいるし、悪天候だってあるので毎日がサバイバル。生存率が低いので、子育ては毎年繰り返されなくてはなりません。春に雄が歌い出し、ペアが誕生し、巣作り、抱卵と続き、早いもので5月、遅くても7月にはヒナが巣立ちます。5月にヒナを巣立たせた後、2度、3度と子育てを続ける小鳥もいますが、虫が多い夏までが子育て期間です。植物のタネを好むスズメでさえヒナには虫が必要で、スズメのヒナが2週間で巣立つまで、親鳥の虫運びは4千回を超えるそうで

す。多くのヒナが生まれても、来年の春まで生きのびるのは一割いらないかというのが現実です



カルガモの親子 (粘土細工)

が、一冬を越せばペアをつくって子育てに取り組むという早い成長と、子だくさんで繰り返される子育てによって、生きのびた一部が子孫を担います。鳥たちに食べられる虫の生存率はもっと低いはずですが、虫はより子だくさんでより早く成長することで命をつないでいます。前回記しましたが、野鳥の子が私たちの目にとまるのは巣立ち後ですから、サイズは親鳥とあまり変わりません。巣立ち後、親子が共にいる期間はスズメで10日ほど、シジュウカラで一ヶ月ほどですが、その間の子はエサをねだる時に翼をバタバタさせるのでわかりやすい。日本野鳥の会が日野市内の小中学校に配布した

ポケットブック「私たちの日野市の野鳥」では、スズメの子は「ほっぺやのどの黒がうすい」、シジュウカラの子は「ネクタイ模様がうすい」、声がかすれている」などと記したほか、例外として親子がわかりやすいカモやキジの仲間についても紹介しました。多くのヒナは孵化した時は丸裸で、眼も開いていません。が、ふわふわの羽毛にくるまれて孵化する彼らのヒナは、眼は開いているし、すぐに歩き出します。彼らの巣は地上にあるので、ヒナは小さくてもすぐに巣を離れないと生き残れないでしょう。なお、巣を離れた直後のヒナを迷子と勘違いして手をさしのべてしまう方が多く、日本野鳥の会では「ヒナを拾わないで」キャンペーンを続けています(詳細は <http://www.wbsj.org/fukyu/hirowanade/index.html>を参照下さい)。

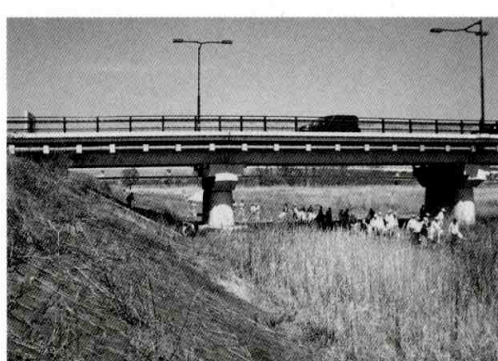
もう一つの例外は、ガン・ハクチョウ・ツルの仲間のように親子やペアの関係が夏以降も続く鳥です。彼らは小鳥やカモ類と比べると子の数が少なく、2年以上経たないと繁殖できないので、生存率が少しは高いのかも知れませんが、近年、カラス類も2年目では繁殖できず、夫婦関係は長く続くことがわかってきました。が、親子関係については秋で終わる、翌年の繁殖期まで続

多摩川・浅川クリーン作戦報告

多摩川と浅川を同日に清掃するようになってから、今年で20回目となりました。毎年、多くの皆様のご参加をいただいで、多摩川と浅川の清掃を行っておりますが、今年も晴天に恵まれて青空の美しい清掃日和となり、1,471名の方のご参加をいただきました。

集合場所は、昨年引き続き、9ヶ所となり、自治会参加の方、一般参加の方、子供会参加の方、様々な皆様の参加をいただきました。集めていただいたごみの量は、可燃ごみが0・97トン、不燃ごみが2・41トン、粗大ごみが2・02トン。なんと、総合計は、5・4トンになります。

参加者の皆様には、私たちの身近にある多摩川と浅川の美化にご協力いただくことにより、河川の恵みを実感していただき自然を守ることの大切さを実感していただけたものと考えています。多摩川と浅川が、ごみのない美しい川となり、私達の素晴らしい河川環境がこれからも守られていくよう願っております。(K・A)



くなどさまざまな例があるようです。
文/写真
(財)日本野鳥の会
主席研究員 安 西 英 明